

「Perry 提督日本遠征記」について

中嶋 暉 : 大陸棚調査室

Introductory Notes on "U. S. Japan Expedition by Com. M. C. Perry"

Tei Nakajima : Continental Shelf Surveys Office

Matthew Calbraith Perryが米上院に提出した日本遠征の報告書が水路部図書館にある。三巻よりなり、布製でA版(29.8×22.5cm)の大きさである。この報告書は下記のほか何度も日本語が出されている。米国ではつい近年になるまで連綿とこの報告書の要約版や翻刻版(最近の復刻版としてはNew York AMS Press 1967がある。その表題等は各巻扉に同じであり、II巻は地図類を別冊としている)。また遠征参加者の日記等関連文書が刊行されたりしており、壮挙というような意味を込めてか、今なお多くの人々の関心事であるようだ。日本でも内外の資料を駆使して時代相の見直しや遠征の意義の再評価がなされたりしている。ここに原本の存在概要を紹介するに併せて、これに含まれている地図類が、訳の際に略されることが多いので、地図類の概略を紹介する。なお類似本が国会図書館にあるが、上下院版が混じっており、表装等も原形をとどめるのはIII巻のみである。その意味で当庁保存版の方が保存がよい。

ペルリ提督日本遠征記 1953～54 岩波書店 土屋喬雄・玉城肇のI巻の全訳 岩波文庫全4冊

ペリー提督日本遠征記 1953 法政大学出版局 大羽綾子のI巻の抄訳

1. 装丁内容について

まず表装について記すと、I巻の背には、下記のように、金箔が押され、巻数の下の空間には洋帆船の絵がやはり箔押しされている(II, III巻では、NAVY DEPARTMENTが1行でなく2行に分けられている)。

SENATE.

UNITED STATES

JAPAN

EXPEDITION

BY

Com. M. C. PERRY.

VOL. I

NAVY DEPARTMENT

表紙には、星条旗の下に洋装の人を、三つ葉葵旗の下に和装の人を、それぞれ左右に配し、富士山的背景の中に2隻の和船と3隻の洋船と人が乗っている小舟が浮かぶ図案を楕円形にまとめた圧刻がなされ、裏表紙には交叉した星条旗に翼を広げた鷲の図案が圧刻されている(この圧刻は、II, III巻と小さな差違が有るようだが、II巻以外は圧刻がもはや明瞭でなくなりかけているので詳しくは識別できぬ)。

各巻の内容の概要

I巻は全体報告であり、XVIII+537頁よりなり、多数の石版銅版による色刷の図絵が頁数を付さずに含ま

れている。当図書館保存版では81～88頁は欠けている。この巻は保存が悪く、布装背表紙が分離している。表紙見返しの右上にChr.(?) Frd.(?) Funch.(?) 15 October 59とインクによる手書きの署名がある(??)は筆者の読みが単語ごとに不確実なことを示す)。これから類推するに、昭和の初めに古本として水路部が入手したものと思われ、1930年9月22日原備という水路部ゴム印のほかには、水路部へ納められた時期を示す証はない。扉の表題を下に示す。

NARRATIVE

OF

EXPEDITION OF AMERICAN SQUADRON

TO

THE CHINA SEAS AND JAPAN,

PERFORMED IN THE YEARS 1852, 1853, AND 1854,

UNDER THE COMMAND OF

COMMODORE M. C. PERRY, UNITED STATES NAVY,

BY ORDER OF THE GOVERNMENT OF THE UNITED STATES.

COMPILED FROM THE ORIGINAL NOTES AND JOURNALS OF COMMODORE PERRY

AND HIS OFFICERS, AT HIS REQUEST, AND UNDER HIS SUPERVISION,

BY FRANCIS. HAWKS, D. D. L. L. D.

WITH NUMEROUS ILLUSTRATIONS.

PUBLISHED BY ORDER OF THE CONGRESS OF THE UNITED STATES.

WASHINGTON:

BEVERLEY TUGKER, SENATE PRINTER.

1856.

言うなら、米政府の命にもとづき、米海軍提督ペリーの指揮のもとに、1852年、53年、54年になされた米艦隊の支那及び日本海域への探検記で、ペリー提督の求めにより、また、その監督のもとに、ペリー提督及びその麾下の士官の直接の手になる覚書や日誌をもととして、多数のさし絵を付して、HAWKS が編集したものである。米議会の命により発行したと刊行目的が記され、ワシントンにて上院印刷局長 Beverley Tucker 1856年と印刷要目が誌されている。

II巻は博物学的報告で、VII + 414頁 + 15頁(条約日本文の複製) + VIII(条約英文及び索引)よりなり、やはり本文中に多数の図絵を頁を付さずに含む。それに加えて、巻末に14枚の、成果をまとめた海図が折り込まれている。やはり表紙見返しの右上には、Chr(?) Frd(?) Funch(?) 1859とインクによる手書きの署名があり、I巻と同じ手である。扉の表題は下の通り。

33d Congress,
2d Session.

SENATE.

EX. DOC.

No. 79.

NARRATIVE
OF
EXPEDITION OF AMERICAN SQUADRON
TO

THE CHINA SEAS AND JAPAN,
PERFORMED IN THE YEARS 1852, 1853, AND 1854,

UNDER THE COMMAND OF
COMMODORE M. C. PERRY, UNITED STATES NAVY,

BY
ORDER OF THE GOVERNMENT OF THE UNITED STATES.

VOLUME II - WITH ILLUSTRATIONS.

WASHINGTON :

BEVERLEY TUCKER, SENATE PRINTER.

1856

訳せば、米政府の命にもとずき米海軍提督ペリーの指揮のもとに、1852年、53年、54年になされた米艦隊の支那及び日本海域への遠征記のうちの図付きの第Ⅱ巻」であり、ワシントンにて上院印刷局長 Beverley Tucker 1856年」という印刷要目はⅠ巻と同じ。さらにこの頁の上縁にはⅠ巻と異なり、上院の文書であること（第33議会、第2会期の特別資料第79号）が付されている。

Ⅲ巻は遠征中に船上でなされた黄道光に関する観測報告でXLⅢ+705頁よりなる。本文は頁全面大の星図と説明記事のセットよりなる。扉の表題は次のとおり。

UNITED STATES JAPAN EXPEDITION.
OBSERVATIONS
ON
THE ZODIAL LIGHT,
FROM
APRIL 2, 1853, TO APRIL 22, 1855,
MADE CHIEFLY ON BOARD
THE UNITED STATES STEAM-FRIGATE MISSISSIPPI,
DURING HER LATE CRUISE IN EASTERN SEAS, AND HER VOYAGE HOMEWARD:
WITH
CONCLUSIONS FROM THE DATA THUS OBTAINED;
BY
REG. GEORGE JONES, A. M.,
CHAPLAIN UNITED STATES NAVY.

VOLUME III

WASHINGTON :

日本遠征記であって、1853年4月2日から1855年4月22日にかけての、アジアでの前回の行動及び故国への航海の間に、米国蒸気フリゲート艦ミシシッピの船上で主としてなされた、黄道光についての観測報告で、それらのデータから得られた成果を含む。著者は米海軍牧師 George Jones, A. M. 師である。

2. 第I巻に挟み込まれている地図類

経緯度格子と縮尺を图示し、海岸線や礁外縁線を与え、ケバで地貌を、ローマ字で地名を表わした地図である。

- ① 151頁のGREAT LEW CHEW and its dependencies。縮尺約53万7千分の1。
 - ② 187頁のISLAND OF GREAT LEW-CHEW。縮尺約396万5千分の1。宮城島、塩屋湾付近に、下線を付して、石炭、鉄、硫黄などの鉱産が示されている。原初からか後日の追筆か不明だが、この下線は赤インクの手書きのペンでなぞられている。
 - ③ 197頁のCHART OF THE BONIN GROUPE OF ISLAND。縮尺約376万分の1。
 - ④ 482頁のTHE ISLAND OF FORMOSA。縮尺約202万分の1。
- その他折り込みの図が2枚ある。
- ① 234頁のMAP OF THE JAPANESE ISLAND。シーボルト図に追加、小改正を加えたものであるとし、ペリーの命により、W. Maury及びSilas Bentが編集したと註されている。縮尺約680万分の1。
 - ② 513頁のCHART showing the track of the Flagship of the U. S. JAPAN EXPEDITION。縮尺約4,700万分の1。喜望峰以東から、日本周辺にかけての航跡が示されている。

3. II巻の海図類について

II巻巻末に折り込まれている14枚の図の題名内容等以下のとおり。なおこのほか、354頁にはハリケーンの進路を示す図が、364頁には挟み込み図として、アジア東岸と北米東岸の海流の類似性等を一枚のメルカトル図に表わした図が見られる。

第1枚目の図

CHART OF THE WORLD
showing the TRACK of the U. S. Steam Frigates
MISSISSIPPI, SUSQUEHANNA AND POWHATAN.
as
FLAGSHIPS OF THE JAPAN SQUADRON.
under command of
COMMODORE M. C. Perry. U. S. N.

1853 - 54.

三船の航跡を世界図に示したもので、毎日の正午の位置が○印で示され、線で結ばれて航跡図となっている。これらに1日の海流の流量を示すMile数を、方向を示す矢印に付して表示している。これはインド洋北半、南支那海、日本近海について图示されている。メルカトル図法により作成されていると思われ、赤

道での縮尺は図上の経線間隔の読み取りで 1 inch 600 mile (≒ 4, 370 万分の 1) で、内法 53. 8 × 90. 6 cm の横長の図である。

第 2 枚目の図

CHART OF THE COAST
OF
CHINA AND OF THE JAPAN ISLANDS
including the
MARIANES and a part of the PHILIPPINES
compiled by order of
COMMODORE M. C. Perry, U. S. N.
from the latest authorities, with additions and corrections by the
U. S. JAPAN EXPEDITION
by Lieut^s. W. L. Maury and S. Bent, U. S. N.
1855.

山地がケバで示され、日本周辺の島名も個々に記され、例えば東京湾に水深が 11 個も記入されている。相
当に精細な図で、地磁気偏角、朔望の平均高潮間隔、海流矢符が、スポットで入れられている。特に中国沿
岸は水深も密に入っている。これに対し、朝鮮東岸や日本周辺は海岸線も未測の部分が多く、当時如何に遅
くまで日本周辺のみが世界に秘されていたかが分かる。本図に記載の地名は開国以後まで、内外で使われる
地名なので一覧図として有用である。日本海は Japan Sea と書かれている。メルカトル図法で作成されてい
ると思われ、赤道での縮尺は図上の経線間隔の読み取りで 1 inch 60 mile (≒ 437 万分の 1) で、内法 104.4
× 100. 8 cm の上下 2 枚貼り合わせの縦長の図。

第 3 枚目の図

ISLAND
of
LEW CHEW
Surveyed by order of
COMMODORE M. C. Perry U. S. N.
by
W. B. Whiting, Silas Bent, G. B. Balch, I. Mathews & A. Barbot.
Lieutenants U. S. N.
1853-54

沖縄本島の全図で + 符と点線で礁の外縁を示している。地貌はケバで示されており、恐らくこんもりした
植生を示すものであろう、複雑な雲形の模様が、地貌を示すケバに重ねられている所がある。那覇周辺、元
部半島周辺、塩屋湾周辺のものに水深が入っている。四囲に経緯度目盛りを付した平面図で、縮尺は 1 inch 2
mile (≒ 14 万 5, 800 分の 1) と記載されており、内法 60. 4 × 56. 0 cm の縦長の図。対景図は入っていない。

第4枚目の図

THE HARBOR
of
NAPHA
LEW CHEW I^D
surveyed by order of
COMMODORE M. C. Perry U. S. N.
by
Lieut. S. Bent
1853

那覇港の図で、基準点の経緯度値と地磁気偏角値、朔望の平均高潮間隔値、最高潮値が記されている。さらに対景図が3図と水路記事 (sailing direction) が記されている。四囲に経緯度目盛りのない平面図で、バースケールの図上読み取りでは、縮尺は3 inch 約7/8 mile (≒ 21,300分の1)で、内法46.8×60.0 cmの縦長の図。

第5枚目の図

LEW CHEW I^D
DEEP BAY
Surveyed by order of
COMMODORE M. C. Perry U. S. N.
by
L^{ts}. W. B. Whiting and A. Barbot
U. S. SHIP VANDALIA J. POPE COMMANDER
1853-54

基準点の経緯度値を与えた、名護湾の図。第3図と同じように、こんもりとした植生を示すためか、複雑な雲型の模様が、地貌のケバと重ねられている。対景図はない。四囲に経緯度目盛りが入っていない平面図で、縮尺はバースケールの図上読み取りで1.8 inch 1 mile (≒ 40,520分の1)であり、44.8×49.0 cmの横長図である。

第6枚目の図

(LEW CHEW)
TUBOOTCH & SUCO
HARBORS
Surveyed Jan'y 1854
by
Lieuts. William B. Whiting and Alphonse Barbot U. S. N.
belonging to U. S. Ship Vandalia
JOHN POPE COMMANDER

by order of

Commodore

Matthew C. Perry

Commanding U.S. Naval Forces in

East Indies, China and Japan Seas

渡久地・瀬底の図で、ケバで地貌を精細に表現。対景図なし。四囲に経緯度目盛りを付した平面図で、縮尺は 20,000 分の 1 と記載されている。内法は 47.0 × 61.8 cm の縦長図。

第 7 枚目の図

SHAH BAY

LEW CHEW I.

Surveyed by order of

COMMODORE M. C. Perry U. S. N.

by

Lieut^s. W. B. Whiting and Alph. Barbot

of the

U. S. SHIP VANDALIA J. POPE COMM.^R

1853

塩屋湾奥部の大尺図で、基準点の経緯度値を与えてある。四囲に経緯度目盛りの付されていない平面図、縮尺はバースケールの図上読み取りで、8 inch 1 mile (≒ 9,110 分の 1)、内法 28.6 × 40.6 cm の横長図。

第 8 枚目の図

KEELUNG HARBOR

FORMOSA ISLAND

Surveyed by order of

COMMODORE M. C. Perry U. S. N.

by Lieut. G. H. Preble & P^d. M^d. Walter F. Jones

in the

U. S. SHIP MACEDONIAN

CAPT. J. ABBOT

1854

台湾の基隆の大尺図で、小さな対景図が 8 図も含まれ、水路記事も含まれている。四囲に経緯度小割りの無い平面図で、縮尺はバースケールの読み取りで 1 inch 1/8 mile (≒ 9,100 分の 1) であり、内法 59.2 × 86.2 cm の横長図。

第 9 枚目の図

THE

COFFIN ISLANDS

Surveyed by order of

COMMODORE M. C. Perry U. S. N.

by

Lieut^S. G. B. Balch, G. H. Cooper & L. A. Beardslee Mid.

of the

U. S. Ship Plymouth

COMMANDER JOHN KELLY U. S. N.

1854

小笠原母島諸島の図で、ラウンドナンバーの経緯度線が一本ずつ入っている以外は経緯度は表示されていない。朔望の平均高潮間隔値と大潮升值が記載されている。平面図で、縮尺は図中のバースケールの読み取りで3 inch 2 mile (≒ 48,600分の1)であり、44.6 × 40.2 cmの縦長図。対景図は入っていない。

第10枚目の図

WESTERN SHORE

of the

BAY OF YEDO

Surveyed by order of

COMMODORE M. C. Perry U. S. N.

by

Lieut. W^m. L. Maury

and other officers of the

JAPAN EXPEDITION

1854

久里浜沖から川崎沖に至る東京湾の西岸の図で、現在の第二海堡は、まだ浅瀬と表わされて存在しない。湾奥部や東岸は未測である。湾内についての水路記事と対景図3図が入っている。観音崎付近の部分を書写して図示した。丘陵のケバの表現、海岸線付近の地類区分の表現、砲台?の表現、地名の表記、図郭の小割など注目に値する。灯明崎付近の記念物とされるものは、当時破損していたとされる灯明台に当たるのか、他の石碑群に当たるのか不明である(第1図)。

劔崎、夏島、横浜開港資料館の経緯度値と、横浜開港資料館のみの地磁気偏角値、朔望平均高潮間隔値、潮高差値が記されている。図上の緯線間隔の読み取りで縮尺は1 inch 1 mile (≒ 72,800分の1)の平面図で、図の四囲には経緯度の小割が入っている。

第11枚目の図

Reconnaissance of the

GULF

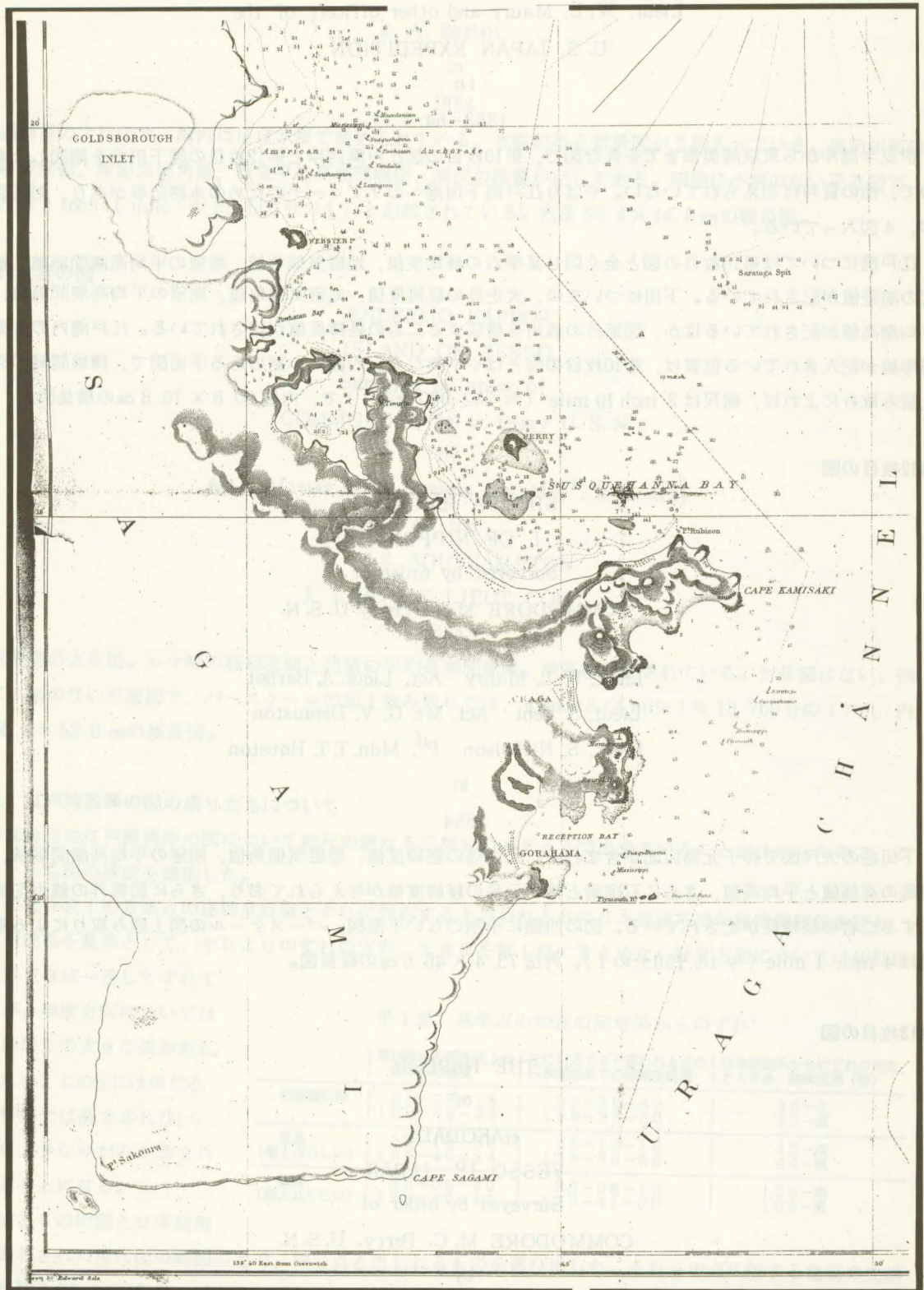
And survey of Western Shore of the

BAY OF YEDO

by order of

COMMODORE M. C. Perry U. S. N.

by



第1図 第10枚目の図「江戸湾西岸」の部分複写

Lieut. W. L. Maury and other officers of the
U. S. JAPAN EXPEDITION
in
1853-54

伊豆半島沖から東京湾奥部までを含む図で、第10枚目の図江戸湾西岸と第12枚目の図下田港を縮図したもので、他の資料は加えられていない。やはり江戸湾下田港へのアプローチのための水路記事があり、対景図が、4図入っている。

江戸湾については第10枚目の図と全く同じ基準点の経緯度値、地磁気偏角値、朔望の平均高潮間隔値、横浜の潮差値が記されている。下田については、犬走島の経緯度値、地磁気偏角値、朔望の平均高潮間隔値、平均潮高値が記されているほか、図郭外の銭州を構成する二岩の経緯度値が記されている。江戸湾内の未測海岸線が記入されている位置は、第10枚目の図とはやや異なる。四囲に小割のある平面図で、緯線間隔の図上読み取りによれば、縮尺は3 inch 10 mile (≒ 242,000分の1)で、内法60.8×70.8 cmの横長図。

第12枚目の図

SIMODA HARBOR
I. OF NIPPON
Surveyed by order of
COMMODORE M. C. Perry U. S. N.
by
Lieut. W. L. Manry Act. Lieut. A. Barbot
Lieut. S. Bent Act. Mr. G. V. Denniston
Lieut. S. Nicholson P^d. Mdn. T. T. Houston
in
1854

下田港の大尺図で神子元島以北が含まれる。犬走島の経緯度値、地磁気偏角値、朔望の平均高潮間隔値、潮高の高極値と平均高値、さらに石廊崎と神子元島の経緯度値が与えられており、さらに図郭外の銭州を構成する二岩の経緯度が記されている。図の四囲に小割のない平面図。バースケールの図上読み取りによる縮尺は4 inch 1 mile (≒ 18,150分の1)。内法73.4×46.6 cmの縦長図。

第13枚目の図

THE HARBOR
of
HAKODADI
YESSO I^d. JAPAN
Surveyed by order of
COMMODORE M. C. Perry. U. S. N.
by
Lieut^s. W. L. Maury, G. H. Preble, S. Nicholson,

& A. Barbot.

in

1854

函館港の大尺図で、湾内はほぼ水深で埋められている。水路記事と対景図が2図入っている。亀田川河口の経緯度値、地磁気偏角値、朔望平均高潮間隔値、潮汐の極値が記してある。四囲に小割のない平面図で、縮尺は2 inch 1 mile (= 36, 500分の1) と記載されている。内法 59. 4 × 44. 0 cmの縦長図。

第14枚目の図

ENDERMO HARBOR
 ISLAND OF JESSO
 Surveyed by order of
 COMMODORE M. C. Perry U. S. N.
 by
 Act^g. Master C. A. Stevens and Midⁿ. R. L. May
 of the
 U. S. S. SOUTHAMPTON
 J. J. BOYLE LIEUT. COM^d.
 1854

室蘭港の大尺図。ニマ岬の経緯度値と朔望の平均高潮間隔値、潮高値が記されている。対景図はない。四囲に小割のない平面図で、バースケールの図上読み取りでは、4 inch 3/4 mile (= 13, 700分の1) で、内法 35. 4 × 52. 6 cmの横長図。

4. 江戸湾西岸の図の成り立ちについて

第10枚目の江戸湾西岸の図について縮尺の異なる三部分のモザイクで出来ていることが分かったので、このことから図の構成を類推した。

この図作成上の基準点の経緯度概値とそれに対応すると思われる点の日本測地系での経緯度概値を読み、日本測地系を基準として、それよりのずれの方向、大きさを第1表にまとめた。経度方向については10秒程度の差でほぼ一致してずれて

いるが、緯度方向については120秒以上の大きな差がある。

このため、この図には単なる、平行移動では済まされない、相当に大きなゆがみが含まれていることになる。

第1表 基準点の現在の測地系からのずれ

	第10枚目の図作成上の 基準点経緯度	左に対応すると思われる点の 日本測地系での経緯度概値	日本測地系からのずれの方向 と大きさ 経緯度差(秒)
開港資料館	35-27-15 139-40-23	35-26-40 139-38-50	35-北 93-東
夏島 (海上点らしい)	35-18-30 139-40-34	35-19-10 139-39-00	40-南 94-東
朝埼 (海上点らしい)	35-06-30 139-42-45	35-08-10 139-41-00	100-南 105-東

まず、この旧図と日本測地

系で表わされた現代図の両図の上で、同じ点と思われるものを選び出した。それらの点に対する亀崎の先端(現代図上 35-14-42 N, 139-44-27 E 概位) および本牧の南縁(現代図上 35-24-38 N, 139-40-00 E 概位) からの経緯度差を、旧図、現代図それぞれの上で読み取り、現代図上での経緯度差に対する旧図上で

の経緯度差ずれの比を取った。その結果を第2, 3表に示す。このような作業を行なう場合、図の伸縮や折り目が有ることから、古い図では図載の目盛を使って、図上で経緯度を読み取るのが常識であるが、この旧図については、保存が良いので図上の経緯度差を5秒の単位で直接測定した。

第2表 亀崎南縁を基準とする各点の記入状況

	駒崎海上点	野比の丘陵東端	あしか島	久里浜少年院裏	燈明崎の碑
第10枚目の図上で亀崎南縁と最上欄の点の間の緯度差(秒)	420	195	200	130	80
日本測地系で亀崎南縁と最上欄の点の間の緯度差(秒)	380	120	130	75	55
上二欄の比	1.11	1.63	1.54	1.73	1.45
第10枚目の図上で亀崎南縁と最上欄の点の間の経度差(秒)	240	120	15	45	50
日本測地系で亀崎南縁と最上欄の点の間の経度差(秒)	210	75	10	40	30
上二欄の比	1.14	1.60	1.50	1.13	1.67

この測定結果を使って比を求めたわけであるから、5秒単位であることなどに、経緯度差の小さいも

第3表 本牧南縁を基準とする各点の記入状況

	旗山崎	馬堀砂海岸東縁	猿島	浦郷町東縁	夏島海上点	夏島東縁	野島東縁
第10枚目の図上で本牧南縁と最上欄の点の間の緯度差(秒)	610	635	550	425	390	390	360
日本測地系で本牧南縁と最上欄の点の間の緯度差(秒)	535	550	460	360	335	330	310
上二欄の比	1.14	1.15	1.20	1.18	1.16	1.18	1.16
第10枚目の図上で本牧南縁と最上欄の点の間の経度差(秒)	305	275	145	70	75	50	110
日本測地系で本牧南縁と最上欄の点の間の経度差(秒)	250	190	110	65	60	40	90
上二欄の比	1.22	1.45	1.32	1.08	1.25	1.25	1.22

	小柴崎	富岡東縁	マツリノフラフ	開港資料館	神奈川幸ヶ谷	総持寺東縁	多摩河口ピロ
第10枚目の図上で本牧南縁と最上欄の点の間の緯度差(秒)	270	190	70	135	235	370	500
日本測地系で本牧南縁と最上欄の点の間の緯度差(秒)	230	160	60	120	200	320	435
上二欄の比	1.17	1.19	1.17	1.13	1.18	1.16	1.15
第10枚目の図上で本牧南縁と最上欄の点の間の経度差(秒)	90	110	20	80	135	40	410
日本測地系で本牧南縁と最上欄の点の間の経度差(秒)	90	70	15	70	120	40	340
上二欄の比	1.00	1.57	1.33	1.14	1.13	1.00	1.21

のこの比は有意でないことになる。このような比ではあるが、全体を見渡すと、本牧の南縁を中心とする観音崎以北の部分では、1.1~1.2、亀崎を中心とする久里浜付近では、1.4~1.5である。この数値がまともなことから、この旧図は、二部分に分けて調整されたことになる。それも、その地形は図載の経緯度格子に対応せずに、やや大きく描かれていることになる。

つまり、経緯度格子からは、前述したように、この図の縮尺は約72,800分の1であるが、この比から観

音崎以北は $1/72,800 \times 1.1 \sim 1.2$ つまり $1/66,000 \sim 1/60,700$ の縮尺で、久里浜付近は $1/72,000 \times 1.4 \sim 1.5$ つまり $1/52,000 \sim 1/48,500$ の縮尺で作られていることになる。実際に現在の地形図上に当時の海岸線と思われる線を求め、約 $1/62,500$ と約 $1/50,000$ の図を作り、この旧図と重ねると観音崎以北と久里浜付近で、地形はかなり良く合致する。これに加えて観音崎以北では同じ $1/62,500$ の縮尺ではあるが、長浦の沖にある吾妻島付近を境に、湾奥部と猿島付近とは平行移動させないと地形が合致しないことが分かった。これはこの旧図上で、現在吾妻島といわれている半島部が非常にやせた幅の狭い半島として描かれていることと関連している。湾奥部と猿島付近は、吾妻島付近で、地形をゆがめて無理やり接続させられたようだ。湾奥北半で、同じ様なことが起こっているかも知れぬが、低平なところでは時代を通じて同じ点と思われるものを選び出すことが難しいので、検出できない。

これらのことから久里浜付近、猿島付近、湾奥部に分けて、正しい測量原図が作成されたと推定される。湾奥に向けて艦隊を漸進させ、日本と外交交渉を進めながら、同時に、測量を進めざるを得なかったであろうこと、1953年は夏の来航であったが、上陸もままならず、満足以基線・其点も設けられぬ測量と想定されること、また54年は友好が深められたとはいえ季節は冬であったことなど多くの困難にもかかわらずほぼ正確な原図が得られたようである。ただ惜しむべきは、基準点の測定結果が悪かったためであろう、意図した縮尺を無視して、場所によって部分的に縮尺を変えて、基準点に合うように測量原図をモザイクする海図編集がなされたと想定されることである。

作成過程について類推できることを要約すると、久里浜付近、猿島付近、湾奥部に分けて、困難な状況のもとで原図が正しく作成された。しかし基準点観測の緯度の測定が悪かったので、悪い基準点成果に合わせて、海図を編集することになった。その際、原図の正しさを尊重して、縮尺だけを無視して揉み込んだ。その結果経緯度格子よりやや大尺の図をつなぎ合わせることとなり、そのひずみを、ある部分のみに集中させた海図ができ上がった。

日本周辺の明治以前の古い海図の一つとして、ペリーの図も世間に知られるべきであり、原本は貴重な資料として、保存されるべきである。そのためには適当な複写を作って、広布するのが望ましい。このような期待を込めて些細な資料批判を加えて紹介文とした。

報告者紹介



Tei Nakajima

中嶋 逞 平成元年12月現在、
本庁水路部海洋調査課大陸棚調査室長